
水魚の交わり

麻戸 槩來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水魚の交わり

【Nコード】

N5199U

【作者名】

麻戸 槩來

【あらすじ】

ある日、ある時、ある男女の会話。狂っているのは私かあなたか？共に狂うことを望んだのはどちらだったか。今となっては意味のない問答。執着という感情が形を変えることは、あるのだろうか？

※2011年10月16日少し手を加えました

ひとむかし

一昔前のある日の事。ひとつの家で、男と女が暮らしておりました。

男は美丈夫で、道を歩けば、おなごから黄色い声が上がるといった具合でありました。

両親は今は無く。男は一人息子であつたがゆえに、父親が一代で築いた貿易会社を引き継ぎ、

仕事一筋で生きておりました。

もともとこの男は色事に関しては淡泊で、そろそろ妻を娶らなければと思ひながらも、

気分に応じておなごを選んで、一夜の戯れを楽しんでおりました。

ですが、それも過去の事。

半年前に高熱を出したことで、熱がひいてから男の片足は不自由になり、後遺症が原因で

床に伏すことが多くなつてしまいました。

その事から総取締役の座を下され、親の残した遺産と、今まで働いたお金をひたすら

使う日々を送っておりました。

一見うらやましく感じる日々ですが、それは男にとっては苦痛でした。

仕事一筋で生きてきた男には、別段、趣味といえる事もなく。

寝る間も惜しみ、仕事に励む忙しい生活に慣れていた男には、三十を手前にして片足が自由に動かない目標を失った生活は想像を絶するものでした。好きな仕事をすることもできずに荒^{すさ}んでいった男から、人々はみな去ってゆきました。

ギリギリまで、男の資産を狙ったハイエナの様な者もいましたが、男はそういう輩を一番に嫌い、追いつ返します。例えば片足が不自由であろうと。——いいえ、不自由であるからこそ、誇りだけは失わんとして、男も必死に虚勢を張っておりしました。

そして皆、近寄る事すらかなわないと知ると、唾を吐きかけ去っていくのです。猫なで声から一変したその様をみて、自尊心の強い男は唇をかみしめる日々を送っておりしました。

・・・それでも猶^{なお}、男の事を見捨てなかった女が一人だけおりました。

その女は、男の親が勝手に見繕った許嫁でした。女の両親は、片足が不自由になった男を見限ったのにも拘^{かかわ}らず、女は男に献身的に尽くしました。どんなに辛く当られても、ひたすら微笑んで望みをかなえ、自分の見合いを蹴ってまで

男の家に住み込んで世話をし続けていました。

俺はこんな体だし、お前のことなど好いてないぞと、卑屈に語る男の言葉にも耳を貸さず。

『私は、ただお傍にいただけで』

そう答え、男の世話を続けていました。

そんなある日のことでした。

普段通り会話をしていた男が、唐突に低い怒りを湛えた声で言いました。

———そうか。

お前は、私を捨てようとしているのだな

女はその言葉に激しく反応し、

———いいえ。そんな訳がございません

と、必死に弁解をしました。ですが自身の妄執に囚われた男に、女の声は届きません。

否定の言葉を聞いてもなお、男は言い募ります。

——いや、お前は私から離れようとしている。お前がいなければ何事も

できん私を置いて

——違います。貴方様は、素晴らしい御方でございます

間髪いれずに返しているにもかかわらず、女が話す度に、男はどんどんと顔を歪めます。

片足を患ってから、弱みを見せんとして表情の乏しかった男にしては、珍しいほどに感情をあらわにしておりました。

声は低いのに、癩癩持ちのようなその様は、まるで子供のようだと女は頭の片隅で考えながら男を眺めます。

——何故だ。お前は私の無能っぷりを知っているだろう。お前がいなければ

息もできん

此処までおとなしかった女も、その言葉には了承しかねて顔を陰しくし、反論します。

——そんな筈がございません。貴方様は私がお世話をさせて貰う前まで、すべての事を

御一人でやっておいででした。大体、私が貴方様から離れるときは、貴方様は

私が必要でなくなった時でございます

——君はそうやって嘘をつくのだな。

もとより、君は私にとってどれだけ自身が重要なのかを分かっている。どうか

分かってくれ。君がいなければ私は本当に駄目なのだ。そしてどうか諦めてくれ。

君が私を殺しでもしないうちは、私は決して君を放しはしない

常とは違う女の反応に不安を覚え、今まで封じていた心を男は吐き出したのでした。

惚れた女にすらも弱みを見せんとしていたのに、此处まで来て籬が外れたのでしよう。

すると突然、男は女を思いっきり抱きしめ、まるで何物にも女の姿を映させないという

ように抱きしめ続けるのです。骨すら軋きしませんと抱く腕に力を込めているのに女は

それにすら、関心のないような冷たい瞳を送り、言葉を発しました。

——貴方は何を言ってるの。きっと貴方は死んだって私を放したりなんてしないんだわ。

ずっと私は、このまま自由も与えられず、貴方という人しか知らずに生き、貴方

しか知らずに死ぬんだわ

女の言葉に漸く、男はきつく抱きしめていた体を少しあけ、女の顔を覗き込みました。

言葉はなかったとはいえ、女に男女の行為を教えたのは目のまえの男でした。

そして、彼女のお腹には二人の子供が宿っているのです。きっと、男と子供の世話をするのは

さぞ重い負担となり、女の肩に押しかかる事でしょう。

これまでの男の様子を見る限り、子供の面倒などとてもじゃありませんが任せられません。

……しかし男の危惧をよそに、女はこの哀れな男を見捨てる選択など持ち合わせてはおりませんでした。

——嗚呼、きっとそうだな。そしてそれを望んだのは君だ。

——ええ、そうね。私はそれを望んだわ

男と女は互いに顔を見つめ、微笑みあいました。

数ヵ月後には、可愛らしい赤子を抱き微笑みあう二人の姿が、その家で見られることでしょう。

（後書き）

水魚之交…水と魚のすいぎよのまじわり関係のように、離れることのできない親密な交わり。（四字熟語辞典より）

10月16日にちよつと改正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5199u/>

水魚の交わり

2011年11月13日15時42分発行